

ばく りゅう  
麥粒

2024. Winter

麦粒 / NO. 142

発行・キリスト教センター

目 次

- 「言葉の記録」…………… 黒柳志仁(3)  
『最後の晩餐』と信仰 …… 鈴木詔明(6)  
「神さまの心」…………… 小椋実央(9)





## 「言葉の記録」

黒柳志仁

初めに神は天と地を創造された。

(創世記1章1節)

今日、皆さんにお伝えしたい、大切なことは何かと言葉を記録する大切さです。皆さんは今まで生きてきて様々な言葉に出会ってきていると思います。しかし皆さんはその中でもどのような「言葉」を大切にしているのでしょうか。その大切な言葉をどうやって記憶しているか、例えばノートを使って、そこに授業で習ったことを記録したりとか、スマートフォンを使って記録をしたりとか、様々な形で紙を使って、文字を記録していると思います。

しかし、今、皆さんがお手持ちにした聖書、これは今日ではほとんど紙に記録をしていますけれども、元々は、この紙というものは使われていなくて、旧約聖書そのものの自体は紀元前1230年頃から、ずっとずっと人々が大切にしてきた言葉が記録をされてきました。では、この紙というものがいつから発明されたと思いますか。実は紀元前1150年頃に、中国の

春秋時代に発明をされました。では旧約聖書、これは紀元前1230年頃ですから、紙がないわけです。ではいったい何に記録をしたと思いますか。今、ここに持ってきたのですが、羊皮紙と呼ばれる羊の皮でできた紙です。羊皮紙に旧約聖書の内容を、人々がずっと大切にしようとしてきた言葉を記録してきました。皮というのはどういうものでしょうか。紙は簡単に破ることができます。簡単に燃えてしまいます。雨が降って、そして風化をしていくと劣化してしまいます。ですが、皮というと、財布とか革ジャンとか、皮でできたものはすごく大切にしている耐久性のあるものが皮で作られていると思います。なぜ旧約聖書というものが今日までずっとこうやって大切に記録をされているかということ、実はこの羊皮紙、つまり皮に記録をされていたから、ということができます。『ハリーポッター』や『名探偵コナン』の中に宝の地図とか、

様々な形で昔の古文書が紹介されますけれども、それらすべては実は羊皮紙というものに記録をされていました。

この羊皮紙、だいたい、1枚いくらぐらいするか想像できますか。こちらは東京の工房にお願いして、厚さは旧約聖書が記録された当時と同じような厚みで作ってもらいました。1枚18,000円ぐらいです。羊1頭から、屠ってこの紙の状態にするまでに48万ぐらいかかるそうです。つまりそれだけ時間をかけて手間暇を使って作らないと、この羊皮紙はできあがらないのです。そこに旧約聖書の言葉が記されてきました。つまり、皆さんの今持っている紙は簡単に手に入れることができ、簡単にゴミにすることができて、簡単に捨てることができます。そこに記した言葉というのは、人を傷つけたりとか、言葉を軽んじたり、SNSで言葉を投じてもすぐにデリートして、人を傷つける言葉は全て消すことができる。捨てることができる。けれども、旧約聖書の書かれたこの羊皮紙は、当時でも手間暇がかかって作られたものに、一文字、一文字、言葉を記録して、300年後、500年後、1000年後の人々にも伝わるように、という気持ちでここに書かれているということになります。その羊皮紙以降には、パ

ピルスというもっと簡素にできるものが発明されています。けれども、聖書は羊皮紙を大切にしてきました。それは言葉が大切だからです。

皆さんが、今まで生きてきて、学生時代をこうやって過ごして、あと300年後、500年後、1000年後の人々にどんな言葉を伝えたいですか？どんな言葉を残したいですか？どんな言葉を残すでしょうか。その気持ちになって、書かれたものが聖書になった。それは皆さんがただ単に読んで、解釈して、ここに何が書いてあるかなということ読むだけでなく、羊皮紙に記された、皆さんがこれからその一文字がずっとずっと残る、その気持ちで聖書を書いた記者たちはそこに文字を書き記していった、ということになります。

今日皆さんにお伝えしたいことは、言葉の大切さです。もしチャペルレポートに余白があれば、皆さんがこれまで生きていて、100年後、200年後の時代に、どんなメッセージを書き残しておきたいか、その気持ちをそこに書いて欲しいと思います。どんな言葉を皆さんは大切にしているか。その気持ちが実は言葉を記録する始まりになりました。これからもインターネットそしてSNSが普及する中でも、皆さんが言葉の大切さというものを

心にとめて、これからも聖書を学んだり、 ます。  
教えを学んだりしていただきたいと思い

(くろやなぎ ゆきひと 国際文化学部准教授 2023.10.12 チャペルアワー奨励)

## 『最後の晩餐』と信仰

鈴木 詔 明

夕方になると、イエスは十二人と一緒にそこへ行かれた。一同が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「よく言っておく。あなたがたのうちの一人で、私と一緒に食事をしている者が、私を裏切ろうとしている。」弟子たちは心を痛めて、「まさか私のことでは」と代わる代わる言い始めた。イエスは言われた。「十二人のうちの一人で、私と一緒に鉢に食べ物を浸している者だ。人の子は、聖書に書いてあるとおり去って行く。だが、人の子を裏切る者に災いあれ。生まれなかったほうが、その者のためによかった。」一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してそれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これは私の体である。」また、杯を取り、感謝を献げて彼らに与えられた。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流される、私の契約の血である。よく言っておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」一同は賛美の歌を歌ってから、オリーブ山へ出かけた。

(マルコによる福音書14章17-26節)

絵画の中でその芸術的価値、人気が高いのは、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』ということに異論はまずないでしょう。

この絵はダ・ヴィンチが1494年から1497年に描いた4 m×9 m大の壁画です。イタリア・ミラノのサンタ・マリア・デッ

レ・グラツィエ修道院の食堂に描かれています。私も予約までしてこの名画に出会いにその修道院に出かけました。その時の感動はいまだに忘れられません。23年もかけて修復が終了した1999年の5年程後のことです。

彼が『最後の晩餐』を描いた頃の壁画

は、フレスコ画が主流でしたが、漆喰が乾けば鮮明な色で長く保存ができるフレスコの良さを避け、あえて時間に余裕がある、絵の具を卵白でとくテンペラという技法で描きました。描き直しができるし、重ね塗りができる反面、剥離しやすいリスクがあることを承知の上テンペラ技法を選択しました。彼が亡くなる(1519年)前にすでに剥離が始まり、その後も修復が何度も重ねられました。原画の完成から500年を費やしてやっと原画のままの絵が再現できたのが現在の状態の壁画です。

絵をみていきましょう。単純な遠近法にのっとり、その中心(消失点)はイエスの顔のこめかみになります。修復している時、そこに釘を打った跡が見つかりました。単純であるがゆえに、水面に石が投げられたかのごとく、12人の弟子たちの表情の変化が波紋のように広がっています。何か重大なことが起こったという緊迫感がうかがえます。

この絵には二つの主題が描かれています。

マルコによる福音書14章17節～26節にありますように、その一つはイエスが「あなたがたのうちの一人で、私と一緒に食事をしている者が、私を裏切ろうと

している。」と裏切り者を告発しています。二つ目は、イエスはパンを取り「これは私の体である。」盃を取り「これは、多くの人のために流される、私の契約の血である。」と言われました。これは、聖書があえて「新約」と言われる理由がはっきりわかります。新しい「契約」というのが新約聖書なのです。また、パンを取り、盃を飲むという行為が、キリスト教会で今日まで執り行われている聖礼典でして、イエスの時代から今日まで綿々と追体験しているわけなのです。

さて、このドラマティックな名場面を描くのにダ・ヴィンチはイエスを正面に三角形の中に収め落ち着きと静寂感をもたらしています。イエスの内面はどこまでも静かで弟子たちを愛の極みまで愛し、背信行為まで予測し、彼らの弱さまでを含めて慈しんでいるように描かれているのは、彼の深い信仰心の現れだと思えます。そして、全人類の罪をあがない救済するために犠牲となり十字架に架かる自らの定めを隠した静寂感、人類への愛も感じ取れ「キリストを中心にしてい」ことが豊かな生活と緊張感ある人生が刻まれると語りかけます。さて、弟子たちの描かれ方に目を移します。

3人ずつ1グループに横並びに構成さ

れています。一人ひとりの魂の動きが・  
心の中が微妙に描き分けられています。

「裏切ったのは誰だ」「まさか私が疑  
われているのかな」等懐疑・驚愕・悲嘆  
様々です。肝心なのはどの画家もこの場  
面を描くのに悩むのは、ユダをどこにど  
のように描くかという問題です。左から  
4番目に驚愕シイエスを見上げ片手には  
銀貨の入った袋をもっています。ダ・ヴィ  
ンチの心の中まで見通す洞察力、芸術性  
には驚きます。「その手に魂が込められ  
なければ、芸術は生まれません。」という

彼の言葉の魂を信仰に置き換えてもあな  
がち間違っていないと私は思うのです。

私も、絵を描く一人です。聖書物語の  
題材、教会や祈りを捧げる姿を描く事だ  
けが信仰と絵を描く行為が結びつくとは  
思いません。神の創造物である自然の中  
の草花、景観、人の営みや表情は神から  
与えられた恩恵だと感謝し、紙やキャン  
パスに魂をこめて描き留め、一人でも多  
くの方に観て頂く喜びも、信仰と芸術は  
つながっていくことだと思っています。

(すずき のりあき 日本基督教団名古屋中央教会会員 2023.6.2 瀬戸「キリスト教と美術」チャペルアワー奨励)

## 「神さまの心」

小 椋 実 央

しかし、主はサムエルに言った。「容姿や背丈に捕らわれてはならない。私は彼を退ける。私は人が見るようには見ないからだ。人は目に映るところを見るが、私は心を見る。」

(サムエル記上16章7節)

預言者サムエルという人がやってきました。新しい王様を選ぶためです。

「エルサレムという町に行ってください。そこに新しい王様がいますよ。」

神様からそう言われて預言者サムエルはやってきました。家の中に入ると素敵な若者が7人いました。背が高く、立派な体つきをして、とても賢そうな顔をしています。ああ、この人が王様に違いない。サムエルはそう思いました。そこに神様の声が聞こえてきました。

「違う。」

それならあちらの若者に違いない。サムエルは思いました。しかしそれもまた。

「違う。」

神様の声が聞こえてきました。この人は？

「違う。」

じゃあこっちは？

「違う。」

じゃあこっち？

「いいえ、違います。」

とうとう7人全員が違う、と言われてしまいました。この立派な若者たちは王様ではなかったのです。サムエルはすっかり困ってしまいました。王様がこの町にいると聞いたからやってきたのです。全員違うと神様に言われてしまったのです。これでは王様を選ぶことはできません。

「あのう…」

この家のお父さんが、おずおずとサムエルに話しかけました。

「あのう、ちょっと言いにくいんですけど、実は末っ子がもう一人いまして」

「え、どういうことですか？」

「いやあ、一番下のチビなんですけど、預言者のサムエル様に合わせるにはまだ

ほんのこどもですし、羊飼いの仕事があるから今日は呼ばなくてもいいかと思ってたんですけど。」

「すぐにその子を呼んでください。」

サムエルは大声で言いました。家の人たちは大慌てで羊飼いの少年を呼びに行きました。

やってきたのはまだ小さいけれど、美しい目をした、とても元気そうな男の子でした。

「この子が新しい王様です。この子に油を注ぎなさい。」

神様の言葉が重々しくサムエルに聞こえてきました。え！？こんな小さな男の子が？こんな子どもが王様になれるんだろうか？サムエルは少し不安でした。でも神様が言われることに従いました。羊飼いの少年ダビデに油を注いだのです。ダビデ王の誕生の瞬間です。

ダビデはやがて、イスラエルで2番目の王様になります。戦いが強くて、人気者のダビデ。賢くて政治の才能がありました。イスラエルの歴史を振り返ると一番人気のある王様です。

ダビデの働きによって生活が安定して、豊かな暮らしが手に入ったからです。人々はみんなダビデのことが大好きでした。けれどもダビデにも失敗があります。い

ろんな失敗がありますが、一番有名なのはバトシェバ事件です。

ある時ダビデはとても美しい女性と出会います。調べてみると、ウリヤという名前の自分の部下の妻であることがわかりました。ダビデはウリヤが戦いに行っている間に、こっそりバトシェバを自分のものにしてしまいます。ここまでなら、まあ、よくある話です。ひどいのはここからです。バトシェバがダビデの子どもを妊娠したと聞いたので、慌ててウリヤを戦地から呼び戻します。お腹の子を無理矢理ウリヤの子どもに仕立て上げるためです。ダビデはあの手、この手でウリヤを家に帰そうとします。お腹いっぱいご馳走を食べさせて、たくさんお酒をのませました。それでもウリヤは家に帰りません。ダビデはとうとう怒って言います。

「どうしてお前は家に帰らないのか。」

ウリヤは胸を張って言いました。

「自分の仲間たちが戦場で戦って、野営しているというのに、自分だけが家に帰ることはできません。」

ウリヤのほうがダビデよりもよっぽどまともな人間です。とうとうダビデはウリヤを戦場の最前線に送ります。そうして事故にみせかけてウリヤを殺してしま

うのです。そしてちゃんと、美しい奥さんバトシェバを自分のものにします。こんなにひどい話はありません。ダビデというのは立派な王様であったかもしれないけれど、とてもひどいことでしたのです。神様はどうしてこんな男を王様を選んだのでしょうか。ダビデが将来こういう間違いを犯すということを神様は知らなかったのでしょうか。ダビデを選んだ時に、神様はこのように言われました。

「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」

神様はダビデを見た目で選んだのではなく、神様の心で選んだ。神様の心がダビデを選んだのです。神様の心とは罪人を愛して憐れんでくださる心です。神様はダビデが、どんなに清く美しい心を持っていても、やがて神様を裏切ってしまう。弱い心も持っていることを知っていました。ダビデが賢くて強いから神様が選ばれたのではなくて、ダビデが愚かで弱弱しいから、神様は選ばれたのです。神様の憐みの心がダビデを王として選びました。ダビデのようなどうしようもない男

を選んで王様としてくださるのだから、神様が私たちを愛さないはずはありません。神様は私たちのいいところをご覧になるのではなくて、むしろ私たちの悪いところをよく見てくださって、神様ご自身の憐みの心で私たちを選び、守り、愛してくださるからです。

もうすぐクリスマスを迎えます。クリスマスは私たちを愛してやまない神様が私たちをさらに愛しぬいてくださるためにイエス・キリストをこの世に遣わしてくださいました。神様に愛されていない人は一人もいません。神様に愛されなくてよい人も一人もいません。

神様の心はいつも私たちのことをご覧になっています。友だちを嫉んでしまう私たち、自分が一番だと出しゃばってしまう私たち、助けを求めている人を無視してしまう私たち。そんな愚かで情けない私たちのことを神様は憐みの心で温かく包んで、励ましてくださるのです。神様の大きな大きな心に励まされて、このことを感謝しつつ、午後からの生活も過ごしていきたいと思います。

(おぐら みお 日本基督教団瀬戸永泉教会 牧師 2023.11.10 瀬戸チャペルアワー奨励)

## チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(相木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？  
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—」  
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？—問(はざま)から読む聖書—」  
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィツシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？—神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎—神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと『敬神愛人』」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く  
—内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ—」(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教  
キリスト教主義大学が大切にしたいこと—『敬神愛人』」(西原 廉太)
- No.25. 「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」  
(早瀬 和人)
- No.26. 「中山間地のソーシャルワーク」(越智 祐子)

麦粒／第142号 2024.3.18 発行 名古屋学院大学キリスト教センター

〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号 ☎ <052>678-4096